

鹿児島県文化財調査報告書第70集



令和6年3月

鹿児島県教育委員会



宝満神社 本殿



楠川盆踊り



アキムチ (イッサンポー)
(徳之島町尾母)



手々むちたぼり
(徳之島町手々)

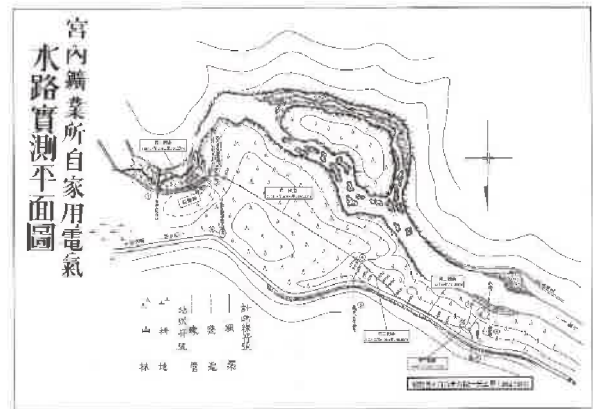


ムチタボレー
(徳之島町上花徳)



イッサンサン
(伊仙町東犬田布)

徳之島の餅もらい行事



金山水車跡（宮内家文書）



鹿児島市新島の貝類遺骸群集（化石）



国史跡「奄美大島要塞跡」



国史跡「鹿児島城跡」

序 文

鹿児島県教育委員会では、貴重な文化財を調査し、記録保存することにより、郷土の文化財を正しく理解し、文化財愛護思想の一層の高揚を図ることを目的として、昭和28年度から文化財調査報告書を刊行しています。

今回は、第70集として、県文化財保護審議会委員が令和5年度に実施した有形文化財及び無形民俗文化財、記念物の文化財調査報告5件の概要を掲載しました。

また、新たに国指定史跡に指定等された2件の概要も併せて掲載しました。

本書が、文化財の保存・活用を図るために広く活用されることを期待します。

最後に、御多用の中を調査・執筆に当たっていただいた県文化財保護審議会委員の方々に深く感謝申し上げます。

令和6年3月

鹿児島県教育委員会
教育長 地頭所 恵

目 次

序 文

第1章 文化財調査報告

- 1 宝満神社本殿・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1
- 2 楠川盆踊り・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 7
- 3 徳之島の餅もらい行事・・・・・・・・・・ 19
- 4 金山水車跡（宮内家文書）・・・・・・ 33
- 5 鹿児島市新島の貝類遺骸群集（化石）・・・・・・ 39

第2章 国指定文化財

- 1 史跡「奄美大島要塞跡」・・・・・・ 41
- 2 史跡「鹿児島城跡」・・・・・・ 42

第 1 章 文化財調査報告

ほうまんじんじゃほんでん
宝満神社本殿

県文化財保護審議会委員 揚村 固

【諸 元】 <用 途>神社本殿 <所在地>熊毛郡南種子町荃永 3786
<建築年>明治 32 (1899) 年 10 月 23 日 (落成記念墨書板)
<構造概要>木造平屋 流造 板葺 覆屋付き

1 既往調査研究

「宝満神社本殿」に関する公的調査は、過去 2 回にわたって行われ、それぞれの報告書に掲載された。平成 2 年 3 月の「鹿児島県の近世社寺建築（離島編）」鹿児島県近世社寺建築緊急調査報告書 p67「3 宝満神社」と平成 29 年 3 月の「鹿児島県の近代和風建築」鹿児島県近代和風建築総合調査報告書 p84-85「33 宝満神社本殿 (No. 1496)」である。前者は文化庁の主導する全国悉皆調査の鹿児島県編で昭和 62 年の本土編の補遺調査（離島編）（調査報告数 34 件 45 棟）である。（注 1）

前者では、一間社 ^{いっけんしゃながれづくり}流造の本殿でその平面形式が地域に特有のものであること、落成記念墨書板（注 2）を根拠として建設年が明治 32 (1899) 年であることと、惣大工の柳田助左エ門と墨大工池亀喜助を明らかにした。

後者は文化庁補助事業として県下 1,700 件を調査したものに収録し、白砂をまいて整備された清楚な印象の参道の印象に触れ、流造の本殿が覆屋で風雨から守られ、本殿内部前半部を開放した特殊な平面形に言及した上で、この形式が同島の王之山神社と弓矢八幡神社に見られるとする。特に王之山神社が翌年建設であり平面形式が同一であることに言及している

2 立地

種子島本島南部で、種子島宇宙センターのある大崎海岸にほど近い南種子町荃永の宝満池を見守るように位置する。

赤米渡来伝説の伝わる地の一つ。社名の由来でもある宝満池（南種子町選定文化財）を取り巻く丘陵の東部で池の見おろせる尾根筋に位置する。（図 1）

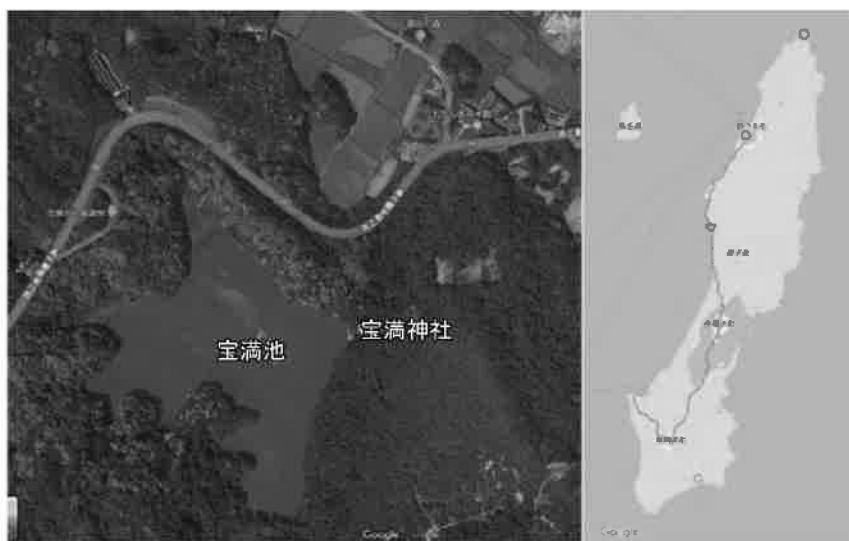


図 1 宝満神社位置図（俯瞰写真・GoogleMap による）

3 建築の構成

神社境内（注1）は、一の鳥居からゆるやかで清楚な印象の白砂を撒き石段のある参道を宝満池に向かうと手水舎に至る（写真1）。この場で気持ちを正し身なりを整える。進路を右手方向に90度変えて社殿に向かい、4段上がって二の鳥居を経て正面の拝殿に至る。本殿はその奥一段の高みに座し、その間の斜面を屋根付き幣殿で繋ぐ（写真1・図2）。



写真1 社名由来の宝満池と白砂の参道



写真2 宝満神社正面拝殿

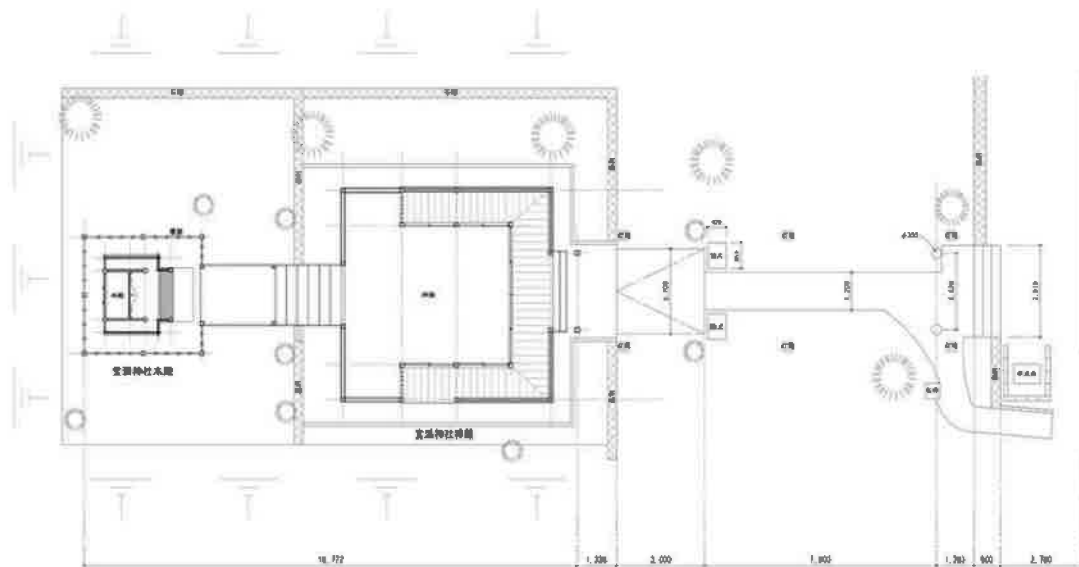


図2 宝満神社建物配置図（左から本殿・幣殿・拝殿・手水場・参道）

4 拝殿・幣殿

拝殿は、昭和22,3年頃消失と伝える。昭和26年再建（資料2一次調査票）。

正面一間（4.4m）側面三間（5.7m）で前方二間分に三方縁を廻す。内部にガラス障子を建て、当初は縁を高欄付きの外縁とするも、後に外周に雨戸敷居を廻して風雨に対処している（写真3）。後補のガラス障子を除けば、建具のない吹きさらしの拝殿形態を彷彿とさせ、見通しの良い古風な姿が好ましい。

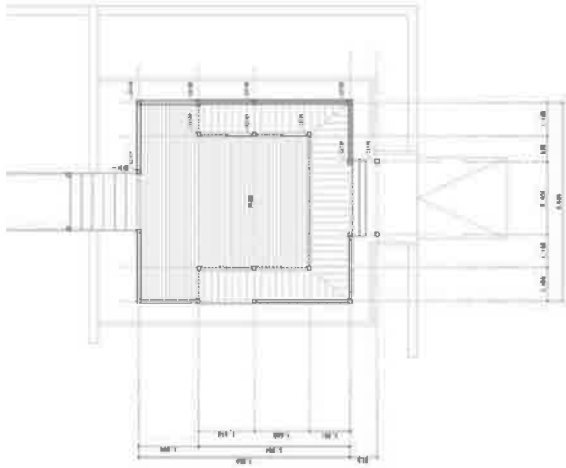


図3 拝殿実測平面図



写真3 拝殿

屋根付きの幣殿は、奥の浜床から5級^{はまゆか}の木階^{きざはし}で本殿に上がる。



写真4 幣殿



写真5 幣殿と本殿

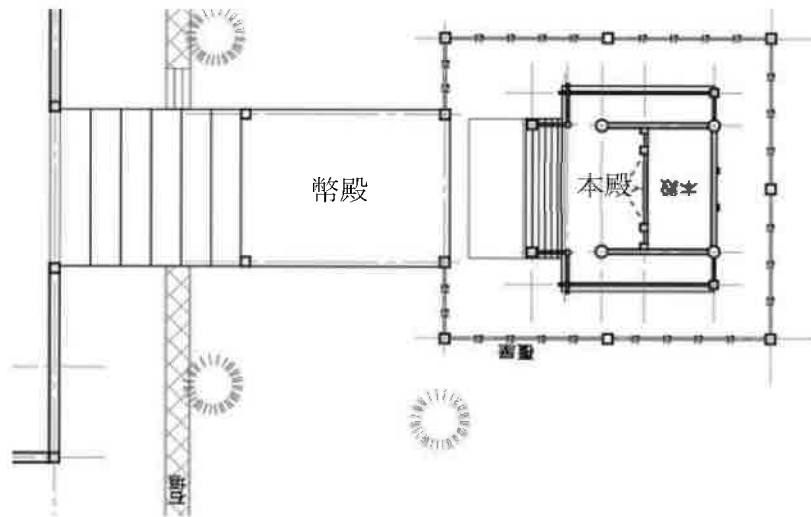


図4 幣殿で一段上がりさらに本殿に上がる

5 本殿

本殿は、丸柱の正面一間(注3)側面一間の一間社流造。正面一間を向拝として几帳面を付けた向拝柱二本を出して建てる。向拝柱に水引虹梁を渡して中央に板墓股を置き、両端に阿吽の象鼻を付ける。柱上に出三斗を置き海老虹梁で舎屋と繋ぐ。



写真6 幣殿から本殿へ



写真7 本殿正面向拝柱・水引虹梁・板墓股



写真8 本殿左側面 向拝柱と海老虹梁



写真9 本殿右側面 向拝柱と海老虹梁

側面内部中程に半柱を付け扉を付けて内外に分ける。後半内部を神域、前半を開放し鏡等置いて神事に供する。この地域に特有の平面の利用形態と言える(写真10)。

屋根は両妻面の大瓶束で棟を支える。正面では軒を二重にし繁垂木で六枝に架ける(写真8, 9)。



写真10 本殿内部で開放された前床部

屋根は、資料1では葺材を棧瓦葺としているが、覆屋の中を見込んでも瓦が見当たらず下地の薄板か柿^{ひらき こけら}が露出している。ある時期に瓦葺きの屋根が損傷したためか、覆屋をかける際に全撤去し、そのために下地材が残って露出したと考える。(写真11)



写真11 屋根の下地材

6 損傷

総体として評価できるこの宝満神社本殿には明らかな損傷が見受けられる。三方に廻した切目縁では切目板の落ちかけが見受けられるがこれは三方縁全体に及んでいる可能性がある。また、縁に施した^{ほねこうらん}芻高欄にも部材に大きな損傷が見られるために修復が必須である。さらに三方縁の左右奥に設えた脇障子の幕板が両者共失われており、この形式の社殿としてはその修復が必須である(写真12, 13)。

文化財の保全継承には、計画的な点検と現状に復する対応が必要であることを指摘しておく。

7 評価

宝満神社本殿は、明治32年に建設された一間社流造の伝統的形式を踏襲するものであり、造作の程度も評価できる。さらに、本殿内部を前後に分割して後部を神域、前部を神事に利用する平面形式が、種子島本島に特有の存在であることを示して貴重である。

また、その立地が、古来の伝承神話の舞台となった自然豊かな宝満池を祀り守るように存在すること、赤米伝来地であることを誇りとして、その関連するお田植え神事や祭事とともに伝承されていることが貴重である。

加えて、その境内はよく整備され、周辺緑地の自然環境とあいまって清楚な神域を形成していることも高く評価できる。



写真12 切目縁板と脇障子の損傷



写真13 芻高欄と脇障子の損傷

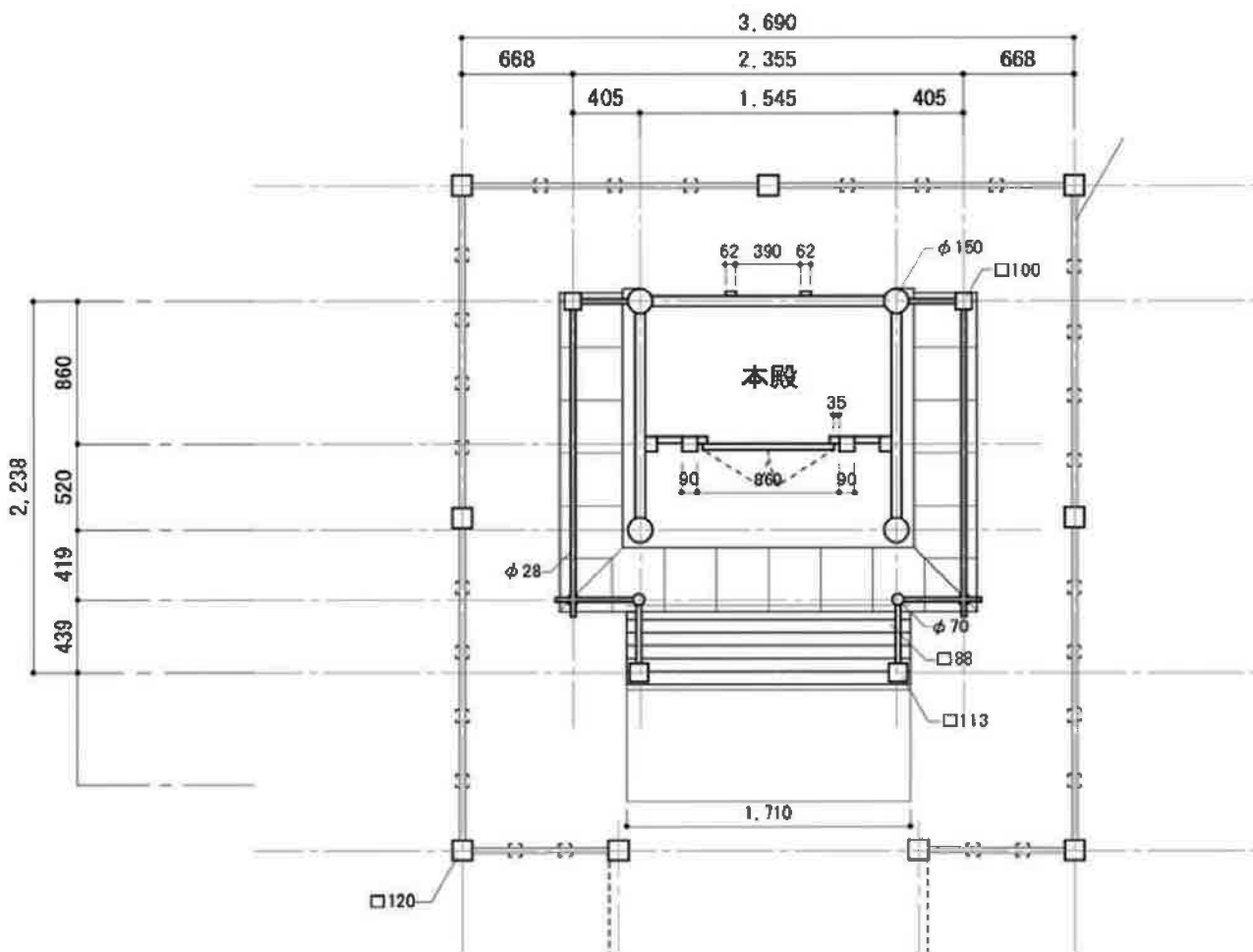


図5 本殿実測平面図

謝辞

調査にご協力いただいた当社氏子新旧総代と南種子町教委諸氏に感謝いたします。

注釈

- 1 ここではガラ（伽藍か）とも伝える。神仏習合時代の名残と考える。
- 2 落成記念墨書板は現在所在不明
- 3 本社の正面柱間は1,545mm(5.1尺) 王之山神社本殿は1,336mm(4.4尺)で僅かに小

引用・参考文献

- 鹿兒島県教育委員会 1990 『鹿兒島県の近世社寺建築（離島編）』 鹿兒島県近世社寺建築緊急調査報告書
- 鹿兒島県教育委員会 2017 『鹿兒島県の近代和風建築』 鹿兒島県近代和風建築総合調査報告書

楠川盆踊り

県文化財保護審議会委員 兼城 糸絵

1 はじめに

本稿は、楠川盆踊りについて報告し、その文化財としての価値について論じることを目的としている。楠川盆踊りとは、鹿児島県熊毛郡屋久島町楠川集落で傳承されている盆踊りであり、地元では「ヨイヤサ」と呼ばれ親しまれている（本稿では便宜上「楠川盆踊り」と表記していく）。楠川盆踊りは、後述するように毎年8月13日と15日（いずれも新暦）に集落の男性によって踊られている。現在、屋久島町の無形民俗文化財に指定されている。

本稿では、2020年及び2023年に行われた調査をもとに楠川盆踊りの概要及び芸能の構成について述べていく^{*1}。その上で、それらの特徴について述べながら文化財としての価値について論じていきたい。なお、掲載された写真は、一部を除いて筆者が撮影したものである。

2 楠川盆踊りの概要

まず、楠川盆踊りの概要について紹介する。すでに述べたように、現在の楠川盆踊りは8月13日と15日に行われているが、かつては旧暦7月13日・15日に行われていたという^{*2}。楠川盆踊りの起源や由来は不明であるが、歌詞の内容を踏まえるとおそらく近世以降に成立した踊りだと考えられる。また、戦後の一時期には中断されていたようだが、昭和42（1967）年頃に若者たちによって再び踊られるようになったという。その後、平成21（2009）年に「楠川盆踊り保存会」が結成され、現在に至っている。

「楠川盆踊り保存会」は、現在20人前後のメンバーで活動している。10代から70代まで幅広い年齢層の人々によって構成されている。盆踊りは、10人～15人の踊り手と太鼓・鼓（それぞれ1人ずつ）によって行われており、すべて男性である。基本的には太鼓・鼓を担当する2人がリズムをとりながら歌を歌い（写真1）、踊り手が囃子を入れながら踊る。曲によっては、踊り手も一緒になって歌うこともある。また、一年の間に身内に不幸があった場合には、踊りに参加できないというルールが存在しているため、踊り手の人数は年によって変化するようである。

次に、踊りの種類について述べていきたい。楠川盆踊りはいわゆる「出端」に相当する「先回し（ヨイヤサ）」と6種類の踊りによって構成されている。すなわち、「四つ竹踊り」、「松島踊り（鈴踊りとも称される）」、「扇子踊り（落平やオテンダーとも称される）」、「手踊り」、「笹踊り」、「伊勢音頭（イセモンド）」である。

また、それらの踊りにはそれぞれ異なる採り物が使われている（写真2）。「四つ竹踊り」の場合には曲の名前のおり「四つ竹」が用いられ、「松島踊り」の際にはスズ（湯呑みに小銭をいれて白

¹ 2021年と2022年は新型コロナウイルス感染症の感染拡大により、盆踊り自体が中止あるいは一部のみ実施されることとなった。状況を考慮し、それらの年は調査を実施しなかった。

² いつ頃変わったのかは定かではないが、1963年に書かれた下野による報告書（下野1963）では旧暦7月13日に行われていたと述べられているため、少なくとも1960年代前半は旧暦で実施されていたことがわかる。また、1980年に発行された『南九州の民俗芸能』（下野1980）では新暦で実施されていたと記述されていることから、1960年代後半～1970年代後半の間に変化が生じたことが推測できる。

い布でくるんだもの) が用いられている。そして、「扇子踊り」では日の丸の扇子が用いられる。「手踊り」では採り物は使われないが、「笹踊り」では笹を2～3本重ねて束ねたものが踊りの中で用いられている。さらに、最後の「伊勢音頭」では再び扇子が用いられる。このように、複数の採り物を用いる盆踊りは他の地域（例えば宮之浦など）でもみられるが、楠川盆踊りほど複雑ではないようである。



写真1：太鼓と鼓（撮影：眞邊彩）



写真2：踊りに用いられる採り物

すでに述べたように、楠川盆踊りは8月13日と15日に行われているが、そのうち13日は本蓮寺の境内で踊りを奉納する。本蓮寺は法華宗の寺院であり、楠川公民館から徒歩2～3分の場所に位置している。本蓮寺では例年8月13日に精霊供養を行っており、それが終わると盆踊りが境内で奉納される。本蓮寺の境内には信徒によって施餓鬼棚^{がき}が作られており、供養に来た人がそこで合掌する。13日の踊りはかつて「施餓鬼踊り」と呼ばれており、この1年間に亡くなった人の冥福を祈るために踊られているという。その際には、寺の堂内にむけて一度踊られ、それから「前岳」（楠川集落と関わりの深い山）に向かってもう一度踊られる。

一方、15日は本蓮寺の境内で踊ったあと、複数の場所で踊りを奉納することになる。例年盆踊りが奉納されている場所と順番については表1にまとめたとおりである。

表1 盆踊りの奉納場所と順番

期日（新暦）	奉納場所
8月13日	本蓮寺の境内（寺の堂内および前岳に向かって1回ずつ踊る）
8月15日	本蓮寺の境内（13日と同様に2度踊る）→村エビス→楠川天満宮（天神様）→熊野神社（熊野様）→港（沖エビス等）→浄土真宗の寺（民家）→屋久島大社 ※休憩を挟んだあと、初盆を迎える家々を回る

しかし、実際にはさまざまな条件により奉納場所が省略されることもある。例えば、筆者が調査を行った2020年は例年のない猛暑であったことから、熊野神社や一部のエビスへの奉納が簡略化された。厳格なルールに従って奉納するというよりも、条件に応じて柔軟に芸能が実践されていることも、楠川盆踊りが今日まで続けられてきた理由のひとつであるように思われた。

これらの奉納が終わると、集落内で初盆を迎える家でも盆踊りが踊られる。詳細は後述するが、特に法華宗の檀家では盆踊りに先立ち「ナンミョウホ」と呼ばれる儀礼が行われる。

3 芸能の構成

本章では、盆踊りの構成について述べていく。まず準備の様子を簡単に紹介し、それから盆踊りの流れに沿って歌詞³と踊りの特徴をみていくことにする。

(1) 準備

盆踊りの当日、保存会のメンバーはまず楠川公民館へ集合し、衣裳へ着替え採り物の準備を行う。踊り手と太鼓打ちはともに浴衣を着用するが、踊り手のみ着物の後ろを尻はしより（着物の裾をたくしあげ、お尻あたりに裾をひっかけた状態）にする。それに加え、踊り手たちは頭に鉢巻を巻いて襷掛けをし、足袋を着用する。また、踊り手以外のメンバーを中心に、踊りに必要な採り物を準備する。準備ができれば、本蓮寺の境内に移動する。

(2) 盆踊りの実際：踊りと歌詞

楠川盆踊りは「先回し（ヨイヤサ）」からはじまり、それから6曲続けて踊られる。盆踊りが行われるにはある程度広いスペースが必要となるが、時に民家の庭や道路のような比較的狭い場所で踊ることも少なくない。楠川盆踊りの場合、どのような場所で踊るにしても、踊り手の「待機場所」ともいべきエリアから「踊り場」ともいべきエリアに「入場」という手順を取る。その際には「待機場所」で踊り手がしゃがんで待機し、太鼓の音が聞こえだすと立ち上がり、踊りながら「踊り場」に「入場」としていくという具合である。この時の「待機場所」は敷地内の入り口あたりになることが多く、「踊り場」は庭先のような場所（あるいは道路や広場）になることが多い。また、太鼓と鼓を担当する者（以下、記述の便宜上「太鼓打ち」と表現したい）は条件に応じて、適切な場所に腰を下ろして演奏を行う。例えば、寺社や民家で踊るのであれば建物の軒先（ないしは縁側）に座って演奏し、屋外であれば踊り手に近い場所に座って歌う。

ここでは、2023年8月15日に本蓮寺の境内での奉納を例にしながら、踊りと歌詞について説明していきたい。

1. 先回し（ヨイヤサ）

「先回し（ヨイヤサ）」とは、伝統芸能等でいうところの「出端」（入場・登場するときの舞踊・音楽）に相当すると考えられる。これらは「先回し」と呼ばれる太鼓と鼓の掛け合いに加え、「ヨイヤサ」という掛け声が印象的な踊り（この踊りのことをヨイヤサと呼ぶこともある）によって構成されている。これらは盆踊りのはじまりに必ず行われるものである。本報告ではこれらをまとめて「出端」として記述していきたい。

まず、「踊り場」の近くで太鼓と鼓の掛け合いが行われる。それが終わると、太鼓打ちは縁側等の演奏しやすい場所へ移動する。そして、踊り手は「待機場所」にて二列に並んでしゃがみ込む。それから、太鼓の音が「トン、トン」と鳴らされるとそれに合わせて踊り手たちが一斉に立ち上がり、「ヨイヤサーヨイヤサー、ヨイヤサッサヨイヤサ、ヨイヤサ」という掛け声を繰り返しながら「踊り場」へ「入場」する。踊り手たちはやや上体をかがめたまま進んでいくが、その際には肘をまげた状態の腕を上体の横に振り出し、それと同時に同じ側の足を一步前に出すという動作を繰り返す。

³ 本報告では『上屋久町郷土誌』に記載されている歌詞を参照しながら、実際に歌われていた歌詞を提示する。なお、『上屋久町郷土誌』を見る限り、今回歌われた歌詞以外にも複数の歌詞が確認できたが、歌われなくなっているものも多いという。

ていく。つまり、右手を前に振り出すと同時に右足を出す、そして左手を振り出す時に左足を出すといういわゆるナンバ歩きで歩いていく(写真3)。この状態で「待機場所」から「踊り場」まで二列でゆっくり進んでゆき、徐々に円を描いていく。「入場」の構図は図1に示したとおりである。そして、それぞれの列の先頭が出会うと「ヨイヤサッサ、ヨイヤサ、シーシー」といい、それ時計回りに円を描きながら進んでいく(写真4)。時計回りに歩き始めた時点で歌い手が「親は百まで」と歌い出し、踊り手が続けて「子は九十九まで、共に白髪が生えるまで」と歌いながらナンバ歩きを続ける。それを歌い終わると立ち止まり、「アレワトセ」と言いながら円の中心に向かって鉢巻をとりながら一礼する。

なお、すでに述べたように、本蓮寺の堂内にむけて踊りが踊られたあと、今度は前岳の方を向いて踊りが行われる。その場合、図2で示すように、正面(=前岳がある方向)が本蓮寺と逆の方向となるため、「待機場所」や「入場」もそれに応じた形で行われることになる。このように、何に対して奉納するかによって、踊り場での「正面」が決まっていく。これは他の奉納場所でも同様である。



写真3 「入場」の様子



写真4 時計回りに円を描きながら踊る
(撮影：眞邊彩)

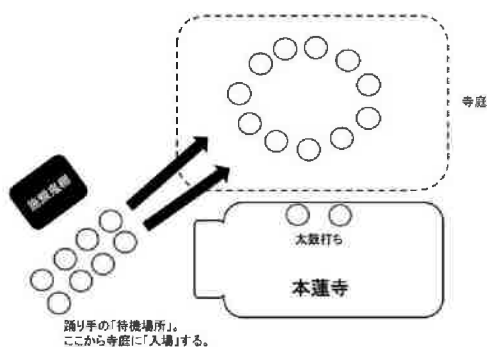


図1 本蓮寺への奉納時の「入場」の仕方

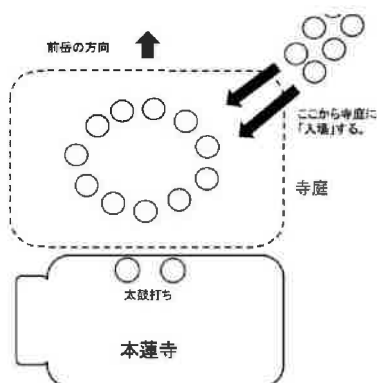


図2 前岳への奉納時の「入場」の仕方

また、踊りの際に唄われる歌には以下の4種類の歌詞が存在している。

- (ア)「親は百まで 子は九十九まで 共に白髪が生えるまで」
- (イ)「屋久の御岳を疎かに思うな 疎かに思うな 金の蔵よりや なお宝」

- (ウ)「嬉しゅ目出度の 若松様よ 若松様よ 枝も栄えて 葉も繁る」
 (エ)「曾根にゃ鳥巻 中海や出魚 中海や出魚 灘の雑魚場にゃ雑魚ばかり」

これらの中から場に応じてふさわしいものが選ばれて歌われている。(ア)は祖先(死者)供養を目的とした場所で踊る際に歌われている。例えば、本蓮寺や真宗の寺、そして初盆を迎える家で踊る場合にはこの歌詞が歌われている。また、(イ)は楠川集落の人々の「聖地」である山(前岳)に奉納する際に歌われている。残りのうち、(ウ)は「神社仏閣」へ奉納する際に歌われている。例えば、楠川天満宮や屋久島大社などである。(エ)は港で奉納する際に歌われている。また、後述するように、笹踊りでもこれらの歌詞が歌われている。

2. 四つ竹踊り

次に踊られるのが四つ竹踊りである。「出端」が終わると、踊りの準備に入るため「トントントン・・・」と太鼓が乱打される。そして、踊り手が四つ竹を両手にはめて所定の位置にしゃがみ込むと、太鼓が「トン、トン、トン」と鳴られ歌が始められる。すると、踊り手が立ち上がって踊り始める。このような流れはすべての踊りに共通している。

また、四つ竹踊り以降は、横二列に並んだまま踊っていく。本蓮寺に奉納する際には図3のようになり、前岳に向けて踊る場合には図4のようになるといった具合に、奉納する対象がなるべく正面になるようにして踊られている。

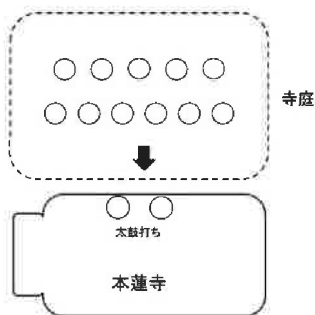


図3：正面の方向（本蓮寺へ奉納する場合）

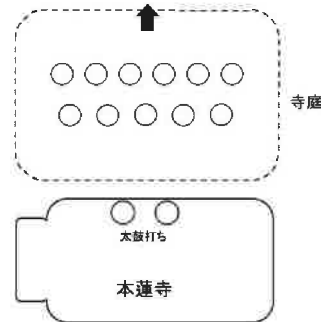


図4：正面の方向（前岳に奉納する場合）

四つ竹踊りの歌詞は以下に示したとおりである。なお、歌は基本的に太鼓打ちの2名によって歌われるが、踊り手による囃子(カッコで示す)も合間に入る。また、踊り手が歌い手とともに歌う箇所もみられる。それに関しては二重下線で示した。

十二 二階の梯子から (ソイジャ)
 上にゃお軽さんがのんのん延鏡
 下にゃ内蔵や文を読む
 ササ 縁の下九大夫は (アオーシ ヨシ)

白川越えの山奥で (ソイジャ)
 あたやさんかと呼んでもみたが

朧月夜の顔と顔

ササ おさんじゃないかいな (アヨーシ ヨシ)

一人とぼとぼ与市兵衛 (ソイジャ)

おおいおおいと呼びかけ定九郎が

縞の財布の金五十両

ササ それさえ手に入れば (アヨーシ ヨシ)

歌が始められると、踊り手は立ち上がって四つ竹を鳴らしながら踊る。踊り手は太鼓の音に合わせて両手挙げながらテンポよく腰を落したり、回転したりする(写真5)。

『上屋久町郷土誌』(以下、『郷土誌』とする)によれば、四つ竹踊りの歌詞の一部は『仮名手本中心蔵』にちなんだものであるという(上屋久町郷土誌編集委員会 1984: pp. 954-955)。

3. 松島踊り

四つ竹踊りが終わると、次は松島踊りである。四つ竹踊りが終わると、再び早いテンポで太鼓が乱打される。その間に踊り手たちは松島踊りで使用するスズを両手に持ち、所定の位置でしゃがみ込む。太鼓打ちが「トン、トン、トン」とリズムよく叩くと歌が始まり、踊り手たちが立ち上がって踊り出す。歌詞は次のとおりである。

花の松島夜更けて通れば (ア ヨイト ヨイト ヨイト)

三味や太鼓のサマヨ 音ばかり

松島来てみれ 良かとおるわい (オイトサッサ)

安房出してから 早崎ヨ見れば (ア ヨイト ヨイト ヨイト)

あの瀬この瀬に サマヨ出て招く

安房思いの船ならば 早崎沖から駆け戻す (オイトサッサ)

物の見事は八幡馬場よ (ア ヨイト ヨイト ヨイト)

松にお鳩がサマヨ巢を組んだ

松島大根 漬大根 石から押されて広うなった (オイトサッサ)

松島踊りでは次のような動きが特徴的である。まず、踊り手たちがスズを「シャンシャンシャン」と鳴らしたあと、上体を前の方に傾けながら左足を一步前にだす。そこから上体を起こしながら体全体を右側に開き両足を大きくひろげて立つ。そして、両手にもったスズを大きく振りながら踊る。体が右側に開いている場合には、左手で調子をとりながら、右手を弧を描くように大きく振る(写真6)。その際もスズは常に鳴らしたままである。一番目の歌詞が終わると、今度は最初に向いた方向と逆の方向に体をむけて同じような踊りをくり返す。絶えずスズの音が響いており、非常に賑やかな雰囲気になる。

また、歌詞には「安房」のような屋久島の地名も登場する。他にも地名らしきものがみられるが、そのうち「松島」とは長崎県西彼杵半島の松島のことであり、かつて寄港地として栄えた場

所だという（上屋久町郷土誌編集委員会 1984：pp.956-957）。『郷土誌』によれば、彼の地では船の乗組員相手の遊郭が栄えていたという。おそらく海を介した本土地域とのつながりの中からこのなよう歌詞が生まれたと推測できる。



写真5：四つ竹踊り（撮影：眞邊彩）



写真6：松島踊り

4. 扇子踊り

松島踊りが終わると、再び太鼓打ちが早いテンポで太鼓をたたく。その間に踊り手は扇子を用意し、それぞれ所定の位置でしゃがみこむ。それから、太鼓が「トン、トン、トン」と鳴らされ歌が始まる。それに合わせて踊り手が立ち上がり踊り始める。歌詞は次のとおりである。

落平の水はヨー ササー大和までとやるヨ （ソイジャ）
ンダシャレ嬉しやアラヨイヨイヨ （サーサー）

仲島や小池ヨー ササー千尋も立つがヨ （ソイジャ）
ンダシャレ嬉しやアラヨイヨイヨ （サーサー）

朝寝して起きてヨー ササー手水鉢ヨ見ればヨ （ソイジャ）
ンダシャレ嬉しやアラヨイヨイヨ （サーサー）

扇子踊りは、やや腰を落とした姿勢から右手を強くふって扇子を開く動作からはじまる。それから開いた状態の扇子を持ちながら歌に合わせて踊る（写真7）。

扇子踊りには沖縄にまつわる歌詞が出てくる。『郷土誌』によれば、「落平」はかつて那覇にあった池（現在はなくなっている）であるとし、「仲島」はかつて遊郭があった場所の地名（現在の那覇市旭町付近）だとしている（上屋久町郷土誌編集委員会 1984：pp.957-958）。また、下野によればこの歌は琉歌の形式（八八八六の詞形）をとっているといい、この歌が鹿児島本土の琉球館でつくられたものではないかと推測している（下野2006:p.48）。どのようにしてこの歌詞が楠川へ伝わったかは不明であるが、屋久島が南島への海上交通路の要所だったという過去を踏まえると、海の道を介した交流の歴史からもたらされた歌ではないかと推測できる。

5. 手踊り

扇子踊りが終わると、再び太鼓打ちが早いテンポで太鼓をたたく。次は採り物を使用しない踊り

であるため、踊り手たちは扇子をおいた後再び所定の位置でしゃがみこむ。みなが揃うのを見計らって太鼓が「トン、トン、トン」と鳴らされると、歌が始まる。歌詞は以下のとおりである。

船の櫓から塩屋町ヨ見ればナ アレワイナサ 塩屋 (オイマカセ)
おきん女が布晒す シテドウジャドウジャ (オイサッサ)

布は晒さずに吾が腰ヨさらすナ アレワイナサ さらす (オイマカセ)
腰元のしおらしさ シテドウジャドウジャ (オイサッサ)

曾根にゃ鳥マキ 中海ゃ一出魚ナ アレワイナサ 灘の (オイマカセ)
雑魚場にゃ 雑魚ばかり シテドウジャドウジャ (オイサッサ)

手踊りは、両手を振り上げて踊るパターンがよくみられる。例えば、歌に合わせて左足を一步前に出すと同時に両腕を右肩の方に振り上げ、続けて右足を一步前に出すと同時に両腕を左肩の方に振り上げる、といった具合である(写真8)。

また、『郷土誌』によれば、歌詞に登場する「塩屋」とはかつて錦江湾に面したところに位置した地名であり(現在の城南町あたりだと考えられる)、塩田と遊郭があったという。詳細については不明な歌詞も含まれているが、少なくとも鹿児島本土との関わりの中で生まれた歌詞だと推測できる。



写真7：扇子踊り



写真8：手踊り (撮影：眞邊彩)

6. 笹踊り

手踊りが終わると、再び太鼓打ちが早いテンポで太鼓をたたく。踊り手たちは笹踊りのための笹をもって所定の位置につき、腰を落とす。みなが揃うのを見計らって、太鼓が「トン、トン、トン」と鳴らされ歌が始まると、踊り手が立ち上がって踊り出す。歌詞は以下のとおりである。

親は百まで さあ子は九十九まで えーさ (ア サッサッ)
共に白髪のおさあ 生ゆるまで (ア ヨシテー)
ンダシャレー サガレー フージャ
シタから見事な (スッチロチンノチン)

屋久の御岳を さあ疎かに思うな えーさ (ア サッサッ)

金の蔵よりゃ なお宝 (ア ヨシテー)
ンダシャレー サガレー フージャ
シタから見事な (スッチロチンノチン)

嬉しゅ目出度の 若松様よ えーさ (ア サッサッ)
枝も栄えて さあ葉も繁る (ア ヨシテー)
ンダシャレー サガレー フージャ
シタから見事な (スッチロチンノチン)

笹踊りでは、全体的に笹を振りながら踊る(写真9)。そして、踊りの途中で隣の人と向かい合い、笹を相手に打ち込むような振り付けがみられるなど、見応えのある踊りとなっている。

また、この歌は他の歌とは異なり、「出端」で用いられる歌詞が歌われている。中でも「屋久の御岳を疎かに思うな」という歌詞は、屋久島ならではの山と人との関係を表現しているようで非常に興味深い。

7. 伊勢音頭

笹踊りが終わると、再び太鼓打ちが早いテンポで太鼓をたたく。踊り手たちは笹をおくと、扇子を手に取り所定の位置に戻る。そして、鉢巻を外して肩にかけるとともに、尻つぶりも外し浴衣の裾を下におろす。それから扇子を手を持った状態でしゃがみこむ。みなが揃うと、太鼓が「トン、トン、トン」と鳴らされ、歌と踊りがはじまる。歌詞は以下のとおりである。

伊勢にゃナー七度 熊野にゃ三度 (ヨイヨイ)
愛宕様にはヤンデ月詣る
ササヤートコ セーノヨイヤナ (アレワトセ)
コレワトセ その何でもせ アー御祝御祝

伊勢はナー津でもつ津は伊勢でもつ (ヨイヨイ)
尾張名古屋はヤンデ城でもつ
ササヤートコ セーノヨイヤナ (アレワトセ)
コレワトセ その何でもせ (アー御祝御祝)

お伊勢ナー詣りにこの子ができた (ヨイヨイ)
御名を何と付きよヤンデ伊勢松と
ササヤートコ セーノヨイヤナ (アレワトセ)
コレワトセ その何でもせ (アー御祝御祝)

歌が始まると左足を前にだし、そのまま右手にもった扇子を左下の方向に勢いよく打ち込む。それから腰を下ろしながら両足を広げるとともに両手をピンと横へ伸ばす。その際、右手には開かれた状態の扇子をもったままにする(写真10)。このような腰を下ろして両足を広げる・両腕を左右に開くという動作が特徴的な踊りである。また、他の踊りに比べると、比較的ゆっくりしたテンポ

で踊ることも特徴だといえる。

また、伊勢音頭の歌詞は、近世に流行したお伊勢参りの歌がもとになっているという(下野 2006: p. 53)。最後にある「御祝御祝 (オイワイ オイワイ)」という歌詞は本来の伊勢音頭には含まれていない。下野はこれに関して盆が終わることを意味しているのではないかと推測しているが(下野 2006: pp. 54-55)、詳細は明らかではない。

伊勢音頭が終わると、踊り手たちはその場でしゃがみこむ。すると、太鼓と鼓が「トントト トントン トントン」という具合にリズムを奏で出す。それが鳴らされると踊りの終了ということになる。

先回しから最後の伊勢音頭が終わるまで大体 12~13 分ほどかかる。特に 8 月 15 日は午後から夜にかけてずっと踊りっぱなしであるため、相当に体力が必要な踊りであるともいえる。



写真 9 : 笹踊り (撮影 : 眞邊彩)



写真 10 : 伊勢音頭 (撮影 : 眞邊彩)

(3) 初盆を迎える家での踊り：特にナンミョウホについて

すでに述べたように、8 月 15 日は本蓮寺から始まって集落内の複数の場所で盆踊りを奉納する(表 1 参照)。それらがすべて終わると、今度は集落内で初盆を迎える家(希望する家のみ)で踊りを奉納する(写真 11)。その際には上述した 1~7 の踊りが一通り踊られるが、法華宗の檀家のみ「ナンミョウホ」と呼ばれる儀礼が行われる。これは先回しを行う前に行われている。厳密に言えばこれは踊りの一部として認識されていないが、楠川盆踊りの位置付けを考える上で重要であると思われるため、簡単に紹介しておきたい。

まず、踊り手たちは鉢巻を外し、尻はしよりではなく浴衣の裾をおろした状態にする。保存会の方で準備していたシキミ(シキビ・櫛)の葉が 3~4 枚ほど配られるので、それらを開いた状態の扇子の上におく。そして、踊り手たちは家の縁側近く(ナンミョウホの際には大抵の家では窓が開けられており、縁側の近くに仏壇や位牌、遺影等が置かれていることが多い)に並び立ち、シキミが置かれた状態の扇子を顔の高さあたりまで持ち上げ、顔をやや伏せた状態にする(写真 12)。あたかも故人が盆踊りをみているかのような構図になる。

用意ができた頃を見計らって、太鼓打ちが「ナンミョウホ」といって太鼓と鼓を叩く。すると、踊り手たちが「レーンゲキョウホ」と応える。それを 3 回繰り返す。そして、今度は太鼓打ちが「レーンゲキョウホ」といって、踊り手が「ナンミョウホ」と応える。そのやりとりを 3 回繰り返す。最後の「ナンミョウホ」が唱えられるや否や太鼓が乱打され、踊り手たちは掛け声とともに扇子の上に乗せたシキミを頭の後ろに放る。それから、敷地の外へ出て鉢巻を絞め、浴衣の裾を帯に挟

みこむなどして、踊りの準備に入っていく。

ここで歌われている「ナンミョウホ（南無妙法）」と「レンゲキョウ（蓮華経）」とは、主に日蓮宗や法華宗などで唱えられる題目である「南無妙法蓮華経」に由来するものだと考えられる。下野によれば、かつては僧侶が「ナンミョウホ」と唱えていたという（下野 2006：p.58）。それを踏まえると、この儀礼はその家の祖先（死者）を供養する目的で行われているものだと解釈することができる。また、初盆を迎える家には法華宗以外の家（例えば真宗系など）も存在するが、そこでは「ナンミョウホ」は行われぬ（盆踊りは踊られる）。そのことから、楠川盆踊りは法華宗と強く関わっている芸能だととらえることができる。



写真 11：初盆の家で踊る様子



写真 12：ナンミョウホ

4 おわりに

最後に、楠川盆踊りがもつ独自性について筆者の見解を簡単に述べていく。

まず、芸態について。楠川盆踊りは出端に加えて6つの曲から構成されている。それらは曲ごとに採り物や振り付けがすべて異なることから、複雑な構成をもつ盆踊りだといえる。中でも、「出端」での踊りには、古い芸態がみられる上に他集落では見られない独特の踊りであることから、楠川盆踊りを特徴付けるものとして注目される。

また、楠川盆踊りには、屋久島ならではの歴史的背景や信仰世界が色濃く反映されていることも大きな特徴である。『郷土誌』によれば、屋久島ではもともと律宗が中心であったが、15世紀頃になると種子島氏の影響のもと、法華宗が広がったという。その後、屋久島のすべての寺院が法華宗へと改宗したが、明治初期の廃仏毀釈を経て浄土真宗が広がったことから、その後の屋久島では法華宗と真宗が二大勢力となっているという（上屋久町 郷土誌編集委員会 1984：pp.891-892）。すでに述べてきたように、楠川盆踊りは本蓮寺の境内で奉納されることや「ナンミョウホ」との関わりを踏まえると、法華宗との関わりのなかで実践され盆行事に定着した民俗芸能といえることができるだろう。

そして、屋久島ならではの山と人との関係性も見出すことができる。屋久島では「岳参り」と呼ばれる行事が行われているように、山に対する一定の信仰が存在している。特に、人々が暮らす集落に近い山を「前岳」、奥にそびえる高い山を「奥岳」と呼び、それらを神聖な空間とみなしてきた。楠川盆踊りにおいても、集落の聖地ともいえるべき前岳にむけて踊りが奉納されている点や踊りの随

所で「屋久の御岳を疎かに思うな」という山に対する畏敬の念を表現したと思われる歌詞⁴⁾が歌われていることから、山岳信仰の影響を一定程度受けていると考えることもできる。これらを踏まえると、楠川盆踊りは、屋久島の歴史の中で展開されてきた独特の信仰世界を背景に成立し実践されてきた芸能だと位置付けることができる。

加えて言えば、屋久島ならではの地域性が歌詞の内容からも見出すことができる。すでに述べてきたように、楠川盆踊りの歌詞には近世以降に流行した歌が取り入れられているほか、琉球（沖縄）や鹿児島本土とのつながりをうかがわせる歌が含まれている。屋久島がかつて南島の島々との海上交通の要所であったという過去がこれらの歌詞からみえてくる。

以上を踏まえると、楠川盆踊りは、屋久島という地域固有の条件のもと成立した独自性の高い民俗芸能だといえることができる。

謝辞

本調査は、楠川盆踊り保存会のみなさまのご協力のもと実現したものです。ここに記して改めて感謝申し上げます。また、屋久島町教育委員会の濱岡尚志氏には、現地調査の調整および同行、また資料提供をしていただきました。鹿児島県教育庁文化財課の眞邊彩氏には 2023 年の調査に同行してもらい、写真や動画の撮影をしていただきました。そして、神戸大学大学院国際文化学研究科博士後期課程の荒木真歩氏には、本稿の執筆にあたりさまざまなアドバイスを賜りました。心より御礼申し上げます。

引用・参考文献

上屋久町郷土誌編集委員会 1984『上屋久町郷土誌』上屋久町教育委員会

下野敏見 1963「屋久島の民俗芸能」『種子島民俗』16 pp. 39-47

下野敏見 1980『南九州の民俗芸能』未来社

下野敏見 2006「ホトケの世界から神の世界へー御岳の神につながる楠川盆踊り」『屋久島、もっと知りたい 人と暮らし編』pp. 37-60, 南方新社

⁴⁾ なお、この歌詞は屋久島の民謡「まつばんだ」にも出てくる他、他集落の盆踊りでも歌われている。しかしながら、その詳細については不明な点が多いためこれ以上の議論は難しい。少なくとも屋久島の人々と山との関係を考える上で興味深い歌詞であるといえる。